

ポスター発表「小学校への羊や犬での触れ合い授業の実践報告」

～牧場飼育員による出前授業の可能性～

今谷 衣都香



もし、子供たちが動物と関わることで、自分の命を大切にしてくれるとしたら、こんなに嬉しいことはありません。牧場の飼育員として出前授業をする中で、私が感じた子供たちの感情は、とても繊細で優しいものでした。

今回のパネル発表では、授業がたとえ一時間でも動物がその場になくてもできる、出前授業の可能性を紹介しています。

1 はじめに

私は神戸にある六甲山牧場という観光牧場で、約150頭の羊の飼育をしています。また牧羊犬での“シープドッグショー”のパフォーマンスや動物触れ合いイベントなども行っています。

そんな私が、出前授業を始めたのは5年前のことです。近隣の小学校からの要望で、「牧場で作られた堆肥を畑にまき野菜作りをしたい、それに伴い堆肥の授業をしてほしい」と

いうものでした。小学校3年生を相手に堆肥の話だけでなく、堆肥が何から作られているのか説明するために、動物の話を交えようとしたのが出前授業の始まりです。

その学校へは毎年授業をするようになり、3年前からは小学校へ牧羊犬と共に授業へ出向くようになりました。

2 目的

飼育員の立場だからできる動物の話を通じて、子供たちに“動物にどのように接してほしいのか”そして“命とは生きるとはどのようなことか”を伝えるのが目的です。

3 実践方法

授業をするにあたり小学校からの要望は、授業時間は1時間というものでした。動物よりも農業や園芸に力をいれている学校での授業ということもあり、その1時間という授業は学校にとっても初の試みだったのでしょう。

(1) 事前に行った学校とのやりとり

実践するにあたり大事にしたことがあります。それは事前に、授業を受けてくれる子供たちのリサーチと先生とのやりとりです。まず担任の先生から、子供たちの人数・子供たちの性格・学校やクラスの様子を聞きました。そして先生にはどこを重視して話をしてほしいか、また私が何を伝える目的で授業を進めていきたいか、などの話をさせて頂きました。

(2) 授業で使用する教材の準備

動物がいない状況での授業では、子供たちがいかに興味をもってくれるかが大切と考えています。そこで見て触れて感じられる教材を揃えました。羊の写真、羊毛、羊のエサ（穀物飼料・乾草）、羊のうんち、牧場で作った堆肥。これらの教材は、動物たちの生きている証であり、ダイレクトに子供たちに“生きること”を伝えることができると考えています。（ちなみに羊に関する教材でまとめたの

は、私が羊の飼育員でありもっとも伝えやすい動物だからです)

(3) 授業の実践・具体的な流れ

- ・授業の教室作り
- ・黒板に羊という文字を書き、その動物のイメージを子供たちに聞く
- ・教材を使用しての動物の説明
- ・堆肥の話
- ・命の話

授業を行う前に、牧場の雰囲気但至少でも味わってもらいたいという思いから、教室作りを行いました。机とイスは使わず、教室にレジャーシートを広げ青空教室をイメージしました。

では授業の具体的な流れを説明します。最初に羊という文字だけを黒板に書き、それがどんな動物なのか想像を膨らませてもらいます。「どんな姿をしている？どんな声で鳴いている？どんな性格かな？触るとどんな感じ？どんな匂いがする？何を食べている？」この問いについて子供たちには自由に発言してもらい、それを黒板に書きました。

そこからは教材を使用し、本当はどのような動物かを説明していきます。教材は近くで見てもらったり、触ったり、嗅いだりしてもらいました。

そして、羊のうんちから堆肥について話をつなげました。最後は家畜動物ならではの、身近に居て命は循環している、という話で終わるのが私の授業の定番です。



羊の写真



羊のエサ・うんち



乾草

4 結果

授業前に事前リサーチと先生と対話をしたことにより、短い授業時間でもスムーズに目的に沿った授業をすることができました。子供たちの様子を事前に聞くことは、授業作りにとっても役立ちます。

また青空教室をイメージした教室作りでは、子供たちとの距離が近くなり、表情もよく見え、さらに発言もしてもらいやすくなりました。消極的な子供も、一生懸命に伝えようとしてくれていた姿勢はすごく嬉しかったです。

授業の最初に文字のみで動物を想像してもらう方法は、子供たちがとても楽しそうに発言してくれました。羊を見たことがある子供もいましたが、「羊が何を食べているか」

「どんな性格なのか」までは考えたことがなかったようで、ユニークな回答が飛び交いました。

例えば「何を食べている？」の問いには草や野菜の他に、お肉やご飯などの回答があり、わたし自身お肉という回答には驚きました。

そして、教材を使用しての説明では様々な反応がありました。写真からは動物の眼差し

や雰囲気を感じることができ、可愛いや優しくなどの声を聞くことができました。刈り取った羊毛（洗うなどの加工はしていません）は触れたり匂いを嗅ぐことで、どんな動物なのか想像することができます。きっと近くに羊が居るような気持ちになってくれたのではないのでしょうか。エサ・うんち・堆肥などは入れ物にいれ、興味がある子供たちが見たり嗅いだりしていました。教材を使ったことにより、子供たちは表情がどんどん明るくなり、笑顔や発言も増えていきました。

そして学校からの要望であった堆肥の話では、難しい内容ながら知ろうという姿勢がありました。羊の生態から羊のうんち、堆肥という流れが理解してもらいやすかったのではないかと考えています。

最後に話した命の循環では、切ない表情を浮かべる子どもも多く見られました。私は飼育員として、日々命と向き合う仕事をしています。そのことを正直に話すことで、「動物に優しくしてあげてね、命はとっても大事なんだよ」と伝えることができました。

私が授業で最も大事にしたことは、子供たちの感情や回答を受け入れる事です。どのような回答も、違うや間違えていると最初から否定せず。黒板に書いたり、なるほど！と共感をすることにより、伝えたいことを子供たちがキャッチしてくれやすくなります。（私が子供の頃の経験ですが、自分の言葉を先生が復唱してくれたり、そのまま書いてくれたのは、とても嬉しくて受け入れてくれたという気持ちになっていました）



授業風景 1



授業風景 2

5 結論

もちろん動物を実際に触つての影響力は絶大です。しかし学校によって、生徒の人数が多かったり、動物へのアレルギーがあったりと、できる・できないがでてきてしまいます。

ですが、動物に実際に触れ合えない場合でも、できることは必ずあります。実際に子供たちは動物の写真を見ただけで、目が輝き興味を抱いてくれました。用意する教材は動物たちの生きている証であり、私はそれを飼育員の立場から伝えることにより、子供たちは真剣に話を聞いてくれると実感しました。

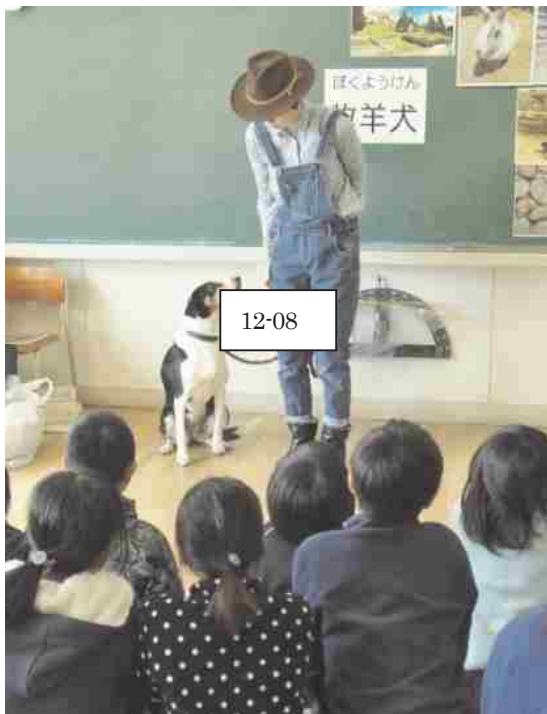
どんな出前授業でも時間は限られており、伝えられることも限られてきます。しかし事前の準備と、自分自身が一番何を伝えたいのかを明確にすることで、内容もブレることなく伝えることができます。

文頭で書いた出前授業の目的は、動物を好きになってもらうのが前提です。子供たちにどうやったら動物に興味を湧いて好きになってくれるかをしっかり考えながら、今後も授



授業風景 3

業作りをしていきたいと思います。



12-08
牧羊犬との触れ合い1



12-09
牧羊犬とのふれあい2

6 新たな試み

3年ほど前から、仕事のパートナーである牧羊犬と出前授業へ出向くようになりました。受け入れて下さる学校が出てきたからです。短い時間の中でも、動物が教室にいるのは、子供たちにとって、言葉では伝えきれない大きなものを与えてくれます。今後は動物と共に授業へ行く回数を増やしていきたいと考えています。

7 研究大会に参加して

私は小学生の頃に全校生徒30人という小さな学校で、羊の世話を6年間していました。校庭の一角に優雅に暮らしていた羊さんは、学校の一員でした。エサやりや掃除はもちろん、仔羊の誕生、そして歳老いていた羊が死んでいく姿も目の当たりにしました。その時は、全校朝礼で先生が涙ながらに報告をしてくださり、生徒全員が悲しみ泣いていた記憶があります。その時、感じた動物への想いは今もしっかりと残っていて、私は飼育員という道を選びました。

今回初めて研究大会に参加させて頂いて、獣医・教育の先生方が子供たちのためにどんな思いで動物の授業をしておられるかを知ることができ、とても感銘しました。先生方のおかげで、私のような思いを受けて、過ごしている子供たちはたくさんいると思います。

今回、出前授業の向上を目的として参加した私ですが、それ以上に過去のことを感謝できる良い機会になりました。

今後も飼育員の立場から、動物の優しく前向きでひた向きに生きる姿を、多くの子供たちに伝えていき“できることから”を合言葉に、動物の命そして自分の命も大切にしていくな子供たちが増えるよう、出前授業を続けていきます。

(六甲山牧場)